

特集

# 大学生の元気がまちをつくる

**今**、大学生による多様な活動が、地域をつくる大きな力となって各地で始動しています。また、大学においても、地域社会と協働して実践的な教育環境を創るための取り組みや、学生の主体的な地域活動への支援を行う動きが増えています。

今号では、大学生のもつ自由な発想と機動力が、地域社会と連携して、地域の活性化につながっている取り組みを紹介し、若者たちによる活動の広がりの意義と、ボランティア・市民活動を推進する大人たちが、どのような役割を果たすべきかを考えます。



ボランティア体験学習講演会



車イスバレーでアイスプレーキング

## 失敗、成功を気にせず「とりあえずチャレンジ」してみよう

SPOT( Searching Potential Opportunity Team ) 兵庫県  
http://spot-ksc.com/

### 若者と地域をつなぐ団体として発足

SPOTは、関西学院大学の神戸三田キャンパスの学生によって構成されるボランティア団体。大学生が気軽に地域貢献活動に参加できる基盤づくりを目的として、2003(平成15)年3月にスタートした。

設立メンバーの体験から、地域社会が若者の力を必要とし、若者も地域貢献をしたいと思っても、「どこへ行けばよいか」「何をしたらよいか」わからないという状態を何とかしたいと、地域貢献をする団体と若者世代をつなぐ活動をめざしている。

活動拠点は大学内に置かず、三田市社協ボランティア活動センター等を拠点として三田市全域で活動しており、メンバー間の連絡は、主にメールを通して迅速に行っている。

### 6つの事業を展開

SPOTの今年度のメインの事業はボランティア体験学習事業で、その他最近始めた多世代交流館での活動を始め、フリーペーパー発行事業、NPOインターンシップ事業、三田市社協ボランティア活動センターからの依頼事業、カナダ留学支援事業の6つを中心に、メンバーの感性を活かして意欲的に活動している。

ボランティア体験学習は昨年からはじめた事業で、中高生を含め全ての地域住民を対象に、ボランティア体験を通して地域を知り、自発的な活動へとつなげる試みとして行った。準備に半年をかけ、昨年6月から8月の2ヶ月間に、計10回に上る学習会や体験活動を連続して実施した。

多世代交流館は三田市が設置した施設で、いろいろな世代が交流できるシニアユースひろば、母親や子どもたちのための子育てひろば

などの事業がある。シニアユースひろばは中高生等の若い世代やシニア世代の仲間づくり、世代間交流を進める場であり、三田市社協が運営している。イベントの中高大生が気軽に話しあおうしゃべり広場「ふらっとーク」で、SPOTは司会を務めたり、参加者が交流するサポートをしている。

フリーペーパー「ぼら衛門」は昨夏に第一号を発行し、第二号を今年始めに発行。国際ボランティア、地域での活動、学内の活動などを紹介している。第一号は学内や取材先に配布したが、今後は多世代交流館他配布先をもっと広げたいと思っている。読者からは、「市内にいなが知らない活動が多いことに驚いた」という声が寄せられた。

### やるべきもの見つけ、とにかくやってみる

現在のメンバーは約30名で、興味のあるいずれかの事業に登録し、事業を担当している。メンバーはSPOTの活動を始めてから、自分のやるべきものを見つけ、何事にも積極的に関わることになったという。三田市、特に大学周辺はいわゆるニュータウンであり、学生は学校と駅との往復になりがちだったが、活動を通して学生と地域とのつながりができてきた。

今後の展望としては6つの事業をより充実させていくこと、課題としては、スタッフ間で片寄りが出てきている負担感をいかに調整するかということがある。スタッフ間の調整は結構大変で、メールによる連絡にとられる時間も多し。

それでも「なにげなくやった活動が、思いがけず感謝されることが多く、それがとても嬉しくて励みになります(代表:北條美代さん)」

台風23号の被害があったときには、三田市からも多くのボランティアが被災地にかけつけました。その際、SPOTのメンバーにもつながりました。迅速な対応が効果を発揮した一例です。学生たちによる体験発表などを見ると、学生は自分の気持ちを伝えるプレゼンテーションの能力が高いと思います。若い人たちは企画力があるので、社協の持っているノウハウや事例も紹介して、企画を形にするサポートができると思っています。また、若い世代のボランティア人口を増やしていくためには、社協も若い人たちと活動していくことが必要であり、SPOTには若い世代へのメッセンジャーの役割を担ってほしいと期待しています。

## 学生が地域を変え、地域が学生を変える地域ボランティア実践の試み

当別町青少年活動センター「ゆうゆう24」 北海道  
http://www.5e.biglobe.ne.jp/~yuyu24/

### 大学を離れて地域に拠点をつくる

札幌市の北隣り、人口2万人の南北に細長い当別町に、北海道医療大学がある。その大学生が主体となって運営する当別町青少年活動センター「ゆうゆう24」(以下「ゆうゆう」)が、2002(平成14)年5月、町の中心にある商店街にオープンした。

ゆうゆうは、1階が喫茶店と授産施設等の製品を販売するスペースと事務所、2階は在宅障害児のレスパイトサービス(一時預かり)の場に使われている。ゆうゆうの開所時間は月曜日から金曜日の10~18時であるが、レスパイトサービスについては、お盆と正月を除く毎日24時間、できる限り依頼に応じている。

### 地域の要望に応えた学生たちの活動

当別町では障害児者への福祉施策が不足しているため、ゆうゆうでは地域の要望に応える形で、在宅障害児へのレスパイトサービスをメインに活動しており、町に住む約60名の在宅障害児のうち約半数の子どもたちが、ゆうゆうに登録している。

町には乳幼児期以降の障害児が通える施設がなく、障害のある子どもたちは学校以外に外に出る機会が少なかった。それがゆうゆうの活動を機に、障害児と健常児が地域の中で関わる機会も増えてきている。

ガイドヘルプサービス(外出や余暇支援のサービス)は、主に障害のある成人が対象で、学生がつきそって外出時のガイドヘルプをする。利用者と同じ年代の学生が付き添うガイドが好評を得ており、札幌市や隣接町村からの利用者が多い。

オープンカレッジ事業は年4回、知的障害者に教育の機会を提供することを目的に実施している。生涯学習の機会の少ない障害者やその家族からの要望に応じて実現したもので、将来は知的障害者のための専門学校・大学の設立を目標にしている。

24時間テレビ協賛事業としてチャリティーイベントにも参加している。イベントの参加者は1年目は50人だったが、2年目は1,200人、3年目の昨年は3,000人が集まった。ゆうゆうは会場のバリアフリー計画を担当し、車イスを利用する子どもたちのための砂場を、シルバーボランティアの元大工さん、高校生、小学生とゆうゆうのメンバーで1ヶ月かけて作った。イベントの準備に携わった3ヶ月間、みんなで福祉についてたくさん話し合い、共に作業したことの意味はとても大きい。

その他にも、高齢者のデイサービスにおける傾聴ボランティア、小中学生の福祉教育の推進、教育委員会との連携による不登校児支援、福祉施設における介助ボランティア、大学との連携による学生のV実習受託事業など多岐に渡る事業を行っている。

### ボランティアコーディネーターの声



大原 裕介さん  
ゆうゆう24  
コーディネーター

### 夢はゆうゆうの仲間として日本の福祉を変えること

札幌の養護学校でのボランティア活動の際に、他大学の学生と出会ったことがきっかけになり、ゆうゆうが事務局となって札幌圏の学生ボランティアネットワーク(「どさんこ学生ネットワーク・しえあ」)を立ち上げました。13大学がネットワークに参加しており、情報の共有化を図っています。しえあに登録している130名の学生が核となり、それぞれの大学の学生に伝達される仕組みで、しえあを使ってそれぞれの大学が力をつけていければと考えています。

ゆうゆうは今年4月にNPO法人を取得する予定です。私を含め卒業生を中心に4人が職員として就職します。法人取得後は、正式に大学の実習先として認定を受けたり、デイサービスやホームヘルプサービス、ナイトケアの一泊サービスなど、事業を広げていきたいと考えています。

一方、NPOになった後も職員が中心となるのではなく、学生が主体的に活動していくためにはどうすればよいか、工夫の必要があると思っています。400人の学生が力を合わせ



当別町にオープンしたゆうゆう24



24時間テレビチャリティーイベントで子ども、大人、障害者の400人の人たちが人の輪を作った企画。

### ゆうゆうの運営体制

ゆうゆうの運営は、二つの体制で行っている。事業計画や予算等の方針を決める運営委員会には学生、教官の他、行政、社協、商工会などの地域の人々が10名ほど参加し、年に数回開催している。その下に実働部隊として、4年生を中心とする学生が日々の運営を担っている。

現在、学生のV登録数は400名。看護福祉学部臨床福祉学科の学生が中心であるが、薬学・歯学など他学部・学科の学生も活動している。毎年4年生になると運営委員を募り、今年は25名がコーディネーターの役割を担い、ゆうゆうを運営している。

ゆうゆうは学内に活動拠点をもっていない。V登録者には、携帯電話のメーリングリストで情報を流している。経験や性別の関係で全員が常時活動しているわけではなく、コーディネーターは初めての学生には経験者と一緒に活動できるようにするなど、調整を図っている。

### 事業を通して学生も地域も変わっていく

ゆうゆうの活動を通して、学生と地域のつながりができてきた。イベントやV活動などを通して個々の関係をつくることで、ネットワークとしてつながり、ゆうゆうも地域に定着してきている。学生も地域住民も、互いにつながることを通して当別町を深く考えるようになった。学生の中には、ゆうゆうには登録せずに札幌市などでボランティア活動をしている学生もいるが、当別という地域で住民と触れ合うことの意味がゆうゆうの学生にとって大きいと考えている。

障害児やその家族、小中学生は活動場所が増え、大学生ともつながるようになった。それまでは子どもから見ると大学生はタバコを吸ったり態度が悪くて怖い存在だったはずだが、今では歩いていると小学生が「〇〇さん」と呼びかけてくる。彼らにとって、親と自分たちの間の年齢の大学生は話しやすいし、中学生は親には相談できないこともゆうゆうのメンバーには話せるということで、小中学生にとってもいいお兄さんお姉さんができたと思う。

ただ、大学生は4年間と活動期間に限られているため、活動の引継ぎが大きな課題となる。ゆうゆうの場合4年生が運営委員を担っているが、秋には国家試験などで引退する。ようやく地域に受け入れて、力をつけてこれからという時期に引退してしまうので引継ぎが大変だった。今後は、4年生の運営委員だけでなく1、2、3年にも同じように組織を作り、活動を円滑に継続していけるように学生間で連携していくことが課題である。

ればこんなことができるということを示していきたいと思うし、そのフォローアップとしての法人化です。

学生は福祉体験を通して変わるということを実感しています。クレープ屋をやりたいと言っていた学生が、福祉施設で働きたいと言っています。それからV活動を通して、福祉に対する思いが明確化することも大きな変化といえます。国家試験や資格がなぜ必要なのか、この活動を通してはしっかり理解するようになります。

4年後くらいには、卒業して全国各地にいるゆうゆうの仲間たちと「ゆうゆうネット」を立ち上げようと思っています。ゆうゆうの目標は当別町を変えることですが、卒業生たちが全国各地で中堅くらいの地位についた頃に、全道、全国の福祉を変えていこうというのが大きな目標です。学生時代同じ思いを持って活動した人たちは、絶対に何かできると思っていますから。

### ボランティア活動センタースタッフの声



大村 和也さん  
三田市社協福祉協議会  
ボランティア活動センター

### 若者の企画力・リーダー力を生かした活動を

SPOTへの支援の一例として、メンバーのボランティア体験の実習場所を紹介したり、地域の多様な団体の紹介やつなぎの役割などを行っています。また学生が社協の事業に協力してくれることで、高齢化の傾向にあるボランティアグループや団体と若い世代とのつながりができたり、社協がV連絡会と主催するボランティアまつりなどの啓発事業には企画の段階から学生が関わり、大きな戦力となっています。

NPO法人が三田市内にいくつかでき始めた頃、横の連携の場があった方がいいということになり、市社協が間を取り持ってNPOサロンさんだ事業や三田市NPO法人連絡会の設立につながりました。連絡会の事業のひとつにNPOインターンシップがあり、社協が連絡会とSPOTをつなぐことにより、SPOTの事業としても広報活動などが協働で行われて

# 学生はのびのびと 特性を生かした活動を 大人は学生が活動しやすい 環境の整備を



田村 真広さん

日本社会事業大学助教授  
全社協・社協における福祉教育  
推進検討委員会委員

## 活動に踏み出す学生たちの支援を

フリーターやニートという言葉が頻繁に聞かれるようになり、社会経済が停滞する中で、現代は学生にとって生き方が見えにくい時代である。自分の本当にやりたいことを探して、ボランティア活動に飛び込む学生もいる。大きなことでも小さなことでも、結局何かをやることでしか「自分とは何者なのか」はわからない。また、活動する中で多様な大人たちと出会い、「大人のサンプル」(モデルではない)を数多く見出せれば、不安の多い現代に生きる若者として勇気づけられるだろう。そうやって自分探しをする学生のボランティア活動を支援することは、今の時代の大人の役割だと思う。

## 活動時間のフレキシビリティが学生の強み

学生による活動の強みは、活動時間にフレキシビリティ(柔軟性、融通性)があることである。仕事をもつ多くの社会人は昼間活動することは難しいが、学生は授業の合間など、平日日中の時間帯に動くことができる。ただ、現代の学生は決して暇なわけではなく、学業の他にアルバイトやサークル活動など、多忙な時間をやりくりしながら活動している。

## 地域との関係が学生を育てる

地域で学生が活動することで生まれる大きな効果は、地域と学生相互の関係性ができることにある。学生がただその町に住み、店で食事をするだけでは地域との関係はできない。地域で活動する中で、学生が地域の様子やそこに住む人々を注意して見るようになり、同時に地域の人々からも見られる関係ができてくる。こうした「感化の教育力」により学生の意識が高まる。

お互いを意識するようになると、学生は自分も地域住民の一員であり何らかの役割を果たしているという自覚が生まれ、地域にどんなニーズがあるのかと日常的にアンテナを張っている状態になる。地域の情報が自然に入ってくるようになり、「自分たちは何をすべきか」という問いにつながっていく。

## 学生の活動に枠をはめない

学生たちの活動は試行錯誤が特徴と言えるだろう。多様なメニューを開発し、実行し、失敗すればやめる。現れては消えていく活動を否定するのではなく、そうした活動の果たしている機能や役割に着目することである。

また、在学中の活動と考えると、活動者は基本的には2~4年間と短いサイクルで交代していく。学生の組織を固定的に捉えず、現在のメンバーができる活動を最大限実現し、中心メンバーが代替わりして組織が変化することを受け入れる。様々な目的を掲げ、多様な手法で取り組む若者たちの組織が、たくさん出てこられる環境をつくるのが大人たちに求められる。

学生の試みが失敗しても、大人たちはその失敗を前向きに捉えることを望みたい。失敗から生まれるものもある。失敗の責任を大人たちが分かち持つことで、学生は「任されている」という信頼感を得るし、「自由」な活動に伴う責任の意味もおのずとわかってくる。

## 活動する環境をつくるのが大人たちの役割

周囲の大人たちが学生たちの活動を支援する際は、あれこれ口を出しながらも、活動しやすい環境を整えることが第一であろう。事例にも見られるが、大学や行政、社協といった“大人たち”が、学生が活動する拠点を提供している。実績はなくても拠点を提供するという環境整備を図ることで、学生たちの活動が発展していく大きな支援となっている。また、地域の多様な市民や活動と出会う機会をつくりつなげることで、学生は“こんな人がいたのか”“こんな活動があったのか”と気付くことができ、それが新たな活動の展開につながっていく。

大人たちは学生たちの活動を、大きく育つ可能性のある“芽”として捉えて、芽が育つための側面支援を考えたい。ボランティアコーディネーターを始め大人たちは、彼らとともに試行錯誤しながら活動をつくっていくことを考えればよいのではないだろうか。

### 2つの 活動事例に ついて一言

**SPOTは...** 立ち上げてこれから軌道に乗せる時期。留学支援や子育て支援にそれぞれ得意な人が活動して、レパートリーを増やしていく。こういう団体がもっと増えて、学生たちの活動の裾野が広がってほしいと思う。

**ゆうゆう24は...** 学生の活動の可能性を示したということで、大きな実績をつかった。今年4月に予定しているNPO法人設立後は、専従職員を置き、学生ではできなかった長期の計画を立てて事業を進めていくことになる。今後いかに学生が主体となって活動を実践していくか、その先駆的な取り組みを期待している。